

感性と表現力



七月十三日(木)の三・四校時、三年生の学年人権集會に招かれました。

この人権集會を迎えるまでには、各学級で人権学習を進めてきています。教材は「ぼくさびしかったんだ」(きずな)というお話です。自分の気持ちを上手に周りに伝えられない、また、受け止めてもらえないことから、もやもやした気持ちを暴力や暴言で友達にぶつけてしまいう子どものお話です。こういうことは子どもに限らずあることですし、子どもの世界では日常茶飯事です。ですから、暴力、暴言、意地悪などの問題行動の背景をしっかり見つめようと、私たち職員は心がけています。

人権集會では、お話に重ねた自分の経験と思いを発表したり、学級のこれからの取組を宣言したり様々でした。お話に重ねた経験は、問題行動をする主人公と自分を重ねている児童もいれば、主人公から暴力や意地悪をされた子どもと自分を重ねている児童もいました。いずれも、とても緊張した様子で発表してくれましたし、その発表に対してお返しした児童もとても緊張して発表してくれました。人前で自分の気持ちを話すというのは、とても勇気のいることです。人前で話すことも緊張しますし、さらに、聞く人が受け止めてくれるかどうか心配です。「言にくいこと」が「伝えたいこと」だったりするものです。だから、その勇気に価値があります。児童のお返しの発表も様々で、「今度から仲良くできたらいいですね」等の客観的な意見や、「大きな声が良かったです」等の発表の内容に触れない感想が多かったように感じます。何かお返しをという気持ちとはとても大事ですし、何をどう伝えるかは今から学んでいけばいいと思います。何かお返しをしようという気持ちの点で、三年生はとても積極的でした。そうしたお返しの発表の中に、自分の経験を差し出して発表した子どもをまるで抱きしめるような、共感的なお返しをする児童もいました。「私が同じクラスだったら、そばにいて一緒にやめてって言います。」こんなに勇気をもらえるお返しはありません。感性と表現力です。そうした感性を日常から育み、授業で表現力を学ばせていかなければならないと改めて感じました。

ところが、集會後の校長の話の中で、私はそうした気持ちに寄り添うお返しの良さについて伝え損ねています。発表することには勇気が必要で、だから価値があることまでは伝えたのですが、何をやっているんだか…。



「思いやり」は見えなくても思える
だれにでも思える

二〇一一年に公共広告機構(ACC)のCMで、「『こころ』は、だれにも見えないけれど『こころづかい』は見える。『思い』は、見えないけれど『思いやり』はだれにでも見える」というものがありました。『行為の意味』(宮澤章二2010ごま書房新社)という詩からの引用です。ちょっと難しいかなと思いつつ、この詩を紹介して話をしました。この詩を改めて読んで感じたことが

あります。この人権集會で、多くの子どもたちがお返しという形で見えない「こころ」を「こころづかい」として見せてくれました。同様に相手に寄り添う「思い」を「思いやり」として見せてくれました。これは、「こころ」や「思い」のプラスの表出です。だったら、「こころ」は見えないけれど「こころの荒れ」も見えるのではないか、「思い」は見えないけれど「苦しい思い」も見えるのではないかと思えます。これぞ感性が汲み取る力です。「我ながらいいトコ気づいたなこりゃ」なんて思っていました。つまりは行為の背景を見るべきという我々が心がけるべき当然のことでありました。ところが、詩は紹介したのにこのことも伝え損ねています。話の冒頭に、「先生やお家の人は、みんなの心がいつも見えています。私も今見えています。この中に『あーお腹すいた。今日の給食なんだっけ?』と思っている心が見えています。」なんてことは言いましたが、何をやっているんだか…。感性と表現力が足りていない今日この頃です。

「汗じゅっくり」は元気

本格的な暑さになってきました。見出しどおり、「汗じゅっくり」になって登校する児童は、おむねあいさつも元気です。逆に休み疲れもあるのか、暑さに参っているのか、元気がない時は汗もかいていないことが多いです。夏休み直前です。体調に気をつけてください。汗ひとつかかずに元気な猛者も少なからずいます。